著作権保護コンテンツ

特集　2012年の受賞作から1938年までを遡って全作品紹介

保存版

コルデコット賞絵本

アメリカで出版された絵本を対象に最もすぐれた作品に年に一度贈られるコルデコット賞。
2012年は去る1月23日に受賞作品が発表されました。1938年から授賞が行われるようになって、
今年で74年。金字塔を打ち立てた歴代の受賞作をご紹介します。

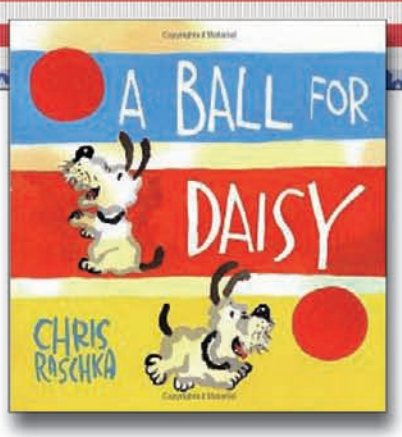
2012~2000

2010

『イソップものがたり ライオンとねずみ』

作／ジェリー・ピンクニー
訳／さくま ゆみこ
1,500円(光村教育図書)

イソップ物語でおなじみの「ライオンとねずみ」を言葉なしの擬音だけで描いた1冊。色鉛筆や水彩を使った描写は、たてがみの質感や心臓の鼓動が聞こえてきそうなほどこまやかで、躍動感にあふれています。



2012受賞作

『A Ball for Daisy』

著／ Chris Raschka

耳としっぽが黒いイヌのデイジーは、赤いボールが大好き。ところが、飼い主の女の子と公園でボール遊びをしている最中に事件が！　文字はほとんどありませんが、デイジーの気持ちが生き生きと描かれています。

2008

『ユゴーの不思議な発明』

作／ブライアン・セルズニック
訳／金原 瑞人
2,800円(アスペクト)

1930年代のパリを舞台に、ユゴーの父が遺したからくり人形をめぐるおはなしです。542ページにわたる絵本は見開きいっぱいにモノクロの鉛筆画が続き、ところどころに文章ページが入る新しい形式を取り入れています。

2009

『よるのいえ』

文／スーザン・マリー・スワンソン
絵／ベス・クロムス
訳／谷川 俊太郎
1,300円(岩波書店)

子どもたちが安心して眠りにつけるマザー・グースの詩をもとにした絵本。スクラッチボードを使った白黒の世界に水彩の黄色が彩りを添え、家や家族のあたたかさを伝えてくれます。

2011

『エイモスさんが かぜを ひくと』

文／フィリップ・C・ステッド
絵／エリン・E・ステッド　訳／青山 南
1,400円(光村教育図書)

風邪を引いた動物園の飼育員エイモスさんを動物たちがお見舞いするストーリー。繊細な木版画と鉛筆のやさしいタッチが物語を引き立てます。エリン・E・ステッドはこのデビュー作で受賞。

コルデコット賞とは

世界的に有名なコルデコット賞は、イギリスの絵本画家ランドルフ・コルデコットにちなみ、世界最初の絵本賞として1938年にアメリカで創設されました。選考対象はアメリカ国籍を持つか、アメリカに居住している者に限られているため、アメリカ国内の賞ですが、歴代の受賞作品を見渡すといずれも世界中で愛され続けているロングセラーばかり。アメリカでは最も古く、最も権威のある賞で、現在では※世界三大絵本賞のひとつでもあります。

主催は米国の児童図書館協会。前年にアメリカで出版された絵本の中から最も優秀な絵本作品に対して、年に一度、授与。受賞者にはコルデコットが描いた『ジョン・ギルピンのゆかいなお話』の登場人物、馬を駆るジョン・ギルピンの姿をレリーフにしたメダルが贈られます。

選考委員には米国図書館協会の児童図書館部会から1年の任期で選ばれた15人があたり、前年新たに発行された全作品に目を通し、5冊の候補作品を決めます。そのうちの1冊に金賞(本賞)を贈り、絵本の表紙には金メダルのシールが永年貼られることに。次点の作品(点数はその年によって違いますが)はコルデコット賞オナーブック(以下、オナー賞)として表紙に銀のシールが貼られます。

※世界三大絵本賞は、他にケイト・グリーナウェイ賞、国際アンデルセン賞をいいます。

著作権保護コンテンツ

マメ知識 本賞を3度受賞しているのは、たった2人だけ

コルデコット賞の長い歴史の中でも、この賞を３度受賞したのは、マーシャ・ブラウンとデイヴィッド・ウィーズナーの２人だけ。マーシャ・ブラウンは『シンデレラ』(1955年)、『むかし、ねずみが…』(1962年)、『影ぼっこ』(1983年)で受賞。彼女はオナー賞も計６回受賞しています。作品は『スズの兵隊』(1954年)、『長ぐつをはいたネコ』(1953年)、『Skipper John's Cook』(1952年、未邦訳)、『ディック・ウイッティントンとねこ イギリスの昔話』(1951年)、『Henry Fisherman』(1950年、未邦訳)、『せかい１おいしいスープ』(1948年)。軌跡をたどると1950年から５年連続でオナー賞を受賞したのち、1955年に本賞に輝いたことがわかります。

一方、デイヴィッド・ウィーズナーは『かようびのよる』(1992年)、『３びきのぶたたち』(2002年)、『漂流物』(2007年)でコルデコット賞を。『フリー フォール』(1989年)、『セクター７』(2000年)でオナー賞を受賞しています。

2002

『3びきのぶたたち』

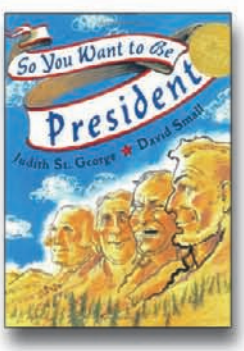
作／デイヴィッド・ウィーズナー
訳／江國 香織
1,600円(BL出版)

作中劇の手法でやや劇画タッチの3匹の子ブタと写実的な子ブタが登場。『3びきのこぶた』をモチーフにマザー・グースの詩やおとぎばなしの世界も登場し、ウィーズナーならではの奇想天外なマジカルワールドを展開します。

2001

『So You Want to Be President?』

文／ Judith St.George
絵／ David Small



2000

『ヨセフのだいじなコート』

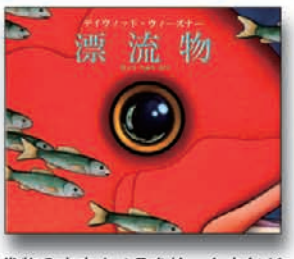
作／シムズ・タバック
訳／木坂 涼
1,400円(フレーベル館)

水彩絵の具とグワッシュ、色鉛筆、インク、コラージュの手法でできた穴あき仕掛け絵本。イディッシュ語の民謡「オーバーコートをもっていた」をもとに生まれた作品で、物を大事にする教えをユーモラスに描いています。

2007

『漂流物』

作／デイヴィッド・ウィーズナー
1,800円(BL出版)



海岸に流れついた年代物の水中カメラを拾った少年がフィルムを現像してみると、驚きの海中世界が……！子どもから大人まで楽しめる文字のない絵本です。ウィーズナーの本賞3度目の受賞作。

2006

『こんにちは・さようならの まど』

文／ノートン・ジャスター
絵／クリス・ラシュカ
訳／石津 ちひろ
1,500円(BL出版)

1994年にオナー賞を受賞したラシュカが、この作品でコルデコット賞を初めて受賞。ひとりの少女と祖父母の心のふれあいを、豊かな色づかいでのびのびと描いています。読み手も聞き手も幸せな気持ちになれる１冊。

2005

『まんまる おつきさまを おいかけて』

作・絵／ケビン・ヘンクス
訳／小池 昌代
1,300円(福音館書店)

お月さまとミルクの入った丸いお皿を間違えてしまう子ネコのおはなし。白と黒で描かれた、はっきりとした輪郭の絵が印象的です。作者にとって34冊目となる児童書で、初のコルデコット賞を受賞。

2004

『綱渡りの男』

作／モーディカイ・ガースティン
訳／川本 三郎
1,600円(小峰書店)

今はなき世界貿易センタービルの２棟の間に綱を張り、綱渡りをした男の実話が描かれています。折り込みページの地上400mから見た足がすくみそうになる街の景色や、ビルを見上げる通行人の視点が圧巻。

2003

『はなうたウサギさん』

作／エリック・ローマン
訳／いまえ よしとも
1,200円(BL出版)

いつだって鼻歌まじりのお気楽なウサギさんは、どこで何をしてもやっかいごとに巻き込まれます。版画イラストのしっかりとした黒い輪郭線と軽めの背景に、力強い色づかいがエネルギッシュな作品。

※英語のタイトルのものは、日本語版が出版されていません(2012年7月現在)。

著作権保護コンテンツ

絵本作家たちの文士劇

てくてく座公演しポート

6月7、8日と2日間にわたり、熊本県北部の山鹿市で第15回絵本学会大会が開催されました。会場は国指定重要文化財にもなっている、明治時代に建てられた芝居小屋の八千代座。初日には絵本作家らによる文士劇が披露されました。その様子をお伝えしつつ、待ちに待った東京公演についてもお知らせします！

入口を飾る、座長力作の看板。

熊本八千代座しポート

てくてく座の初公演は10年ほど前で、実は同じ八千代座で行われたのでした。今回、絵本学会の実行委員長となった長野ヒデ子さんが、「どうせなら楽しいことを」と、座長の飯野和好さんに声をかけ、てくてく座の面々が召集されました。前回から交流が続いていた、「絵本とおはなし風吹きからす」のみなさんの応援もまじえて、作家さんと地域のみなさんが一丸となって準備が進められたのです。

この場所でやるからにはと、当日最初に舞台に上がったのは地元の娘さんたちによる山鹿灯籠踊り。あでやかな品のある舞いに、客席からは盛大な拍手が送られました。

そうして観客の期待が最高潮に達したときに幕が開きました。お茶屋さんの店先には、ささめやゆきさん演じるおしかばあさんと、ひっそりたたずむお地蔵さん。そこへ中川ひろたかさん扮する旅の薬り売りせんじろうが陽気に現れ、続いて飯野和好さんの謎の旅人浪曲師ことねぎ家朝太郎が登場です。

朝太郎の浪曲とともにおはなしは進みます。村で評判のお千代さんが、あべ弘士さんのはまり役、悪党の鬼ぐるみのごんぞうに言い寄られていて、ついに力ずくで連れ去られてしまいます。恋仲の八太郎は、無事に助け出すことができるでしょうか？その先は観てのお楽しみ。

公演後の座談会では、演者の作家さんたちの本音がちらほら。座長は厳しかったとの声もあり、とくに関西弁でひょうきんな長谷川義史さんは「座長はアドリブ許してくれへん」と。練習でアドリブを入れると、それはいらないと言われてしまうから、本番までひそかにとっておいたそう。そのかいあって、大阪弁の台詞回しに会場は爆笑の渦でした。

前回は恥ずかしいからと黒子に徹したささめやゆきさんは、今回は思

山鹿灯籠ってなあに？

山鹿灯籠は古くから大宮神社に奉納するためにつくられ、伝えられてきたものです。今日では全国でもまれに見る精緻な紙細工として有名で、木や金具は一切使わず、和紙と少量の糊だけでつくられ、柱など骨組みにいたるまで中が空洞であることが特徴です。8月の山鹿灯籠祭りでは、民謡「よへほ節」の調べにのせて、頭上に灯籠をのせた女性たちが優雅に「千人灯籠踊り」を舞います。

八千代座での灯籠踊り。

公演後の座談会は、ずらり並んで和気あいあいと。

著作権保護コンテンツ

指導／木村 研　きむら・けん

1949 年、鳥取県生まれ。児童文学作家、手づくりおもちゃ研究家として全国の子どもたちに創造する楽しさを教える。主な著書に『999 ひきのきょうだい』(ひさかたチャイルド)、『手づくりおもちゃを 100 倍楽しむ本』(いかだ社)、『わくわくかんたん手づくり絵本』(チャイルド本社)など。

おはなし会を

盛り上げよう！

簡単な工作編

輪ゴムや紙コップなど、身近にあるものを使って手軽に製作できる
手づくりおもちゃをご紹介します。
物語の導入への活用、自己紹介遊びなど、あなたのアイデアをプラスすることで
楽しさも倍増すること間違いなし。
簡単ですからさっそく挑戦してみてくださいね。

イラスト／アンヴィル 奈宝子　文／菅原 千賀子

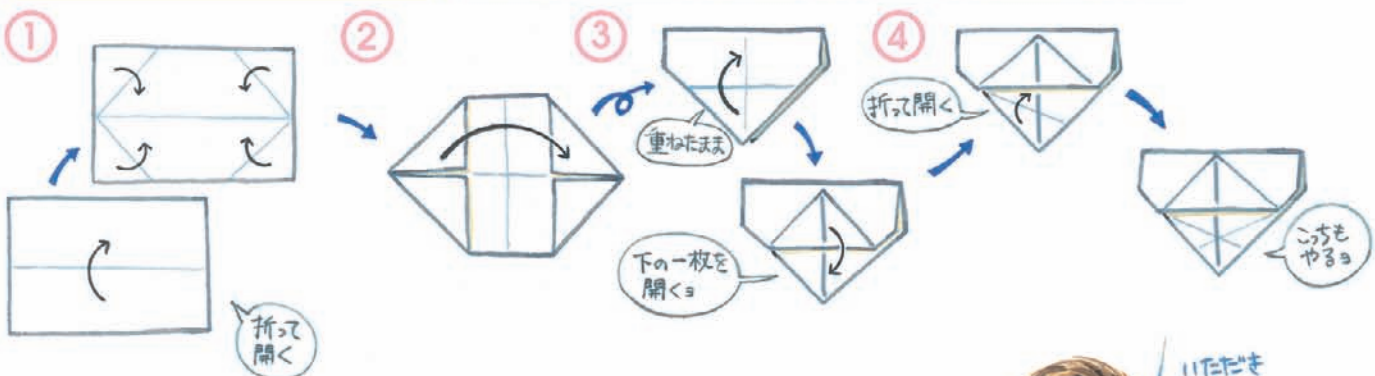
カッパのパクパク

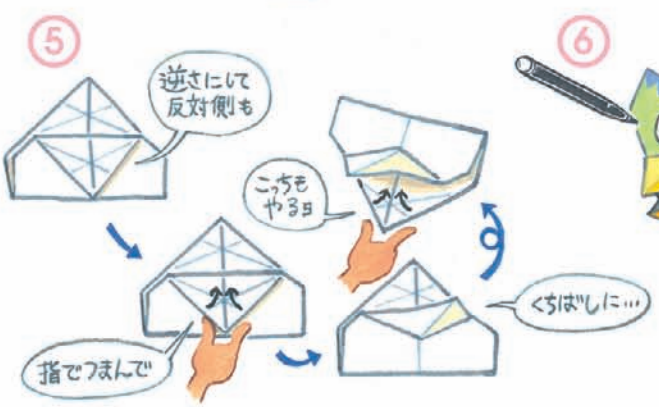
大きな口がパクパク動き、おしゃべりも、
口でものをはさむのもお手のもの！

材料　長方形の紙 / 水性ペンなど

つくり方

① 長方形を横長に半分に折り、一度開いて四つの角を折る。
② とがった部分を合わせるように折る。
③ とがったほうを手前にして、２枚を上に折る。
④ 下の１枚を開き、折り目をつけて戻す。
⑤ 上下をかえて、上の１枚も折り目をつけて開き、くちばしのような形をつくる。
⑥ 水性ペンなどでカッパの顔を描く。





遊び方

左右を両手で持って動かすと、くちばしがパクパク。
ものをはさんで遊ぶこともできますよ。

著作権保護コンテンツ

ぜーんぶプレゼント 新刊100!!

もう読んだ？

2012年3～5月に発売された新刊絵本の中から、読みきかせにもおすすめの100冊を選びました。子どもたちとすてきな時間を過ごしてください。プレゼント応募はアンケート用紙、またはウェブから。

※出版社五十音順

マークは乳幼児から、

は中・高校生も楽しめる本です。

『むし コレ』

たくさんの虫が登場します。知っている虫、何匹いるでしょう。でも、この本、虫を種類（ハチ・カブトムシなど）で分けるだけでなく、大きさ、色（あお・あか・みどり）など、ちょっとユニークな視点のコレクションでもあります。虫のきれいな模様をじっくり見られますよ。

作・絵／accototo
ふくだとしお＋あきこ
1,300円（イーストプレス）

『みどりのカーテンをつくろう』

緑のカーテンは、植物のゴーヤーのつるや葉っぱがつくってくれます。苗を植えて、毎日育てていくと、もう友だちです。ゴーヤーの気持ちになって、一緒に育ててみましょう。カーテンは涼しい風を運んでくれるだけでなく、しっかりゴーヤーも実りました。

作／菊本 るり子
絵／のぐち ようこ
1,000円（あかね書房）

『あしたも ね』

一日遊んで夕方になっても友だちとさよならしたくないブーくんは、みんなを何度も呼び戻し野原で〈あした〉を待とうと言い出します。でも、みんなは帰ってしまいました。翌朝みんなが野原に来てみると、ブーくんがいません。どうしたのかな。

作／武鹿 悦子
絵／たしろ ちさと
1,300円（岩崎書店）

『なぜカツラは大きくなったのか？ 髪型の歴史えほん』

毛むくじゃらだった祖先の頭の上に毛が残ったときから、髪型の歴史が始まりました。最古のカツラを誕生させたエジプト人、ローマ式ハゲ治療薬、高さ1mのマリー・アントワネットの髪、カラーリングの始まりなど、興味深いエピソードに驚くばかりです。

文／キャスリーン・クルル
絵／ピーター・マローン
訳／宮坂 宏美
1,600円（あすなろ書房）

『おうしげきだん』

町におうし劇団がやってきました。座長は雄牛のクレマタ、座員はウシばかり、出し物は「闘牛士のタンゴ」です。最初に現れたのは牝牛の美女カルメンモウです。情熱的な舞台に観客は魅了され、大満足！　おうし座生まれの人におすすめの絵本です。

作／スズキ コージ
絵／伊藤 秀男
1,300円（岩崎書店）

『ミチクサ』

あおいさんが見つけた「まあるいはっぱが4枚」ついている草の名はミチクサ。そのはっぱをカタツムリ、カマキリ、天井のクモが食べてしまいます。ミチクサを食べたクモは、空の雲みたいにふくらんで雨を降らせたから、さあ大変です。

文／田中 てるみ
絵／植田 真
1,400円（アリス館）

『ごはんよごはん こぶたちゃん』

いやいやをしてごはんを食べようとしないこぶたちゃんですが「それなら おとうさんに、はい どうぞ」と言うと「こぶたちゃんの」と言って食べ始めます。「あむあむもりもり」たくさん食べておなかいっぱいになりました。パパもママもにっこりです。

文／うしろ よしあき
絵／とみなが ゆう
650円（赤ちゃんとママ社）

『くもくもぱんやさん』

青空に「ぽこぽこ ぽこん」と浮かぶおいしそうなパン。くもくもぱんやさんの焼いたパンです。かみなりさんの子どもにできたてパンを届けようと、くもくもぱんやさんは虹の橋を使いました。リズミカルな文章は、心がはずんできます。

文／やまうち ゆうこ
絵／いのうえ ふみか
1,200円（岩崎書店）

『ゆーらり まんぼー』

あたたかい海に暮らすまんぼーは、ちいさな魚たちにつんつくされて目が覚めました。サンゴ岩まで競争しようと誘われたけど、まんぼーにはお散歩のほうが向いているようです。まんぼーの一日は、こうしてのんびり、ゆったり過ぎていくのです。

作／みなみ じゅんこ
1,300円（アリス館）

『おすしですし！』

おすしの大好きなすしおくんの夢は、自分のお店を持つことです。春、弟子入りしたのはいけすの魚を使ってだじゃれですしを握る「だじゃれずし」でした。修業の旅で出会った親方は、言葉遊びですしを握る人ばかりです。楽しくて満腹になりますよ。

作／林 木林
絵／田中 六大
1,300円（あかね書房）

著作権保護コンテンツ

『とびだせにひきのこぐま』

春になり、長い冬ごもりの穴で生まれた2匹の子グマたちが、母グマと一緒に穴から出てきました。元気よく走り回る子グマたちにとって、すべてが初めて見るもの、体験することばかりです。子グマたちの様子を母グマが幸せそうに見守っています。

文・絵／手島 圭三郎
1,700円(絵本塾出版)

『こころの家』

心って、誰にでもあるのによくわからない。自分の心なのに自分でもわからない。いったい、心って何なのでしょう。ねぇ、心って、僕たちの住んでいる家に似ていないかな？　ページをゆっくりめくりながら、考えてみましょう。

文／キム ヒギョン
絵／イヴォナ・フミエレフスカ
訳／かみや にじ
1,600円(岩波書店)

『ふくしまからきた子』

広島に住むだいじゅは、サッカー好きな男の子です。隣のおばあちゃんのところに、福島からまやという女の子が越してきました。あの原発事故以来、まやの家族はバラバラに暮らしているのです。子どもの目を通して、原発と未来について考えることができます。

作／松本 猛、松本 春野
絵／松本 春野
1,300円(岩崎書店)

『よーい ドン！』

今日は運動会です。去年のかけっこで3番だったちーちゃんは、パパと練習を重ねてきました。「今年こそは1番になるね」とはりきって走り出しましたが、おばあちゃんの応援する「ちーちゃん」という大きな声に……、あれれ、ちーちゃん!?

作／ビーゲン セン
絵／山岸 みつこ
1,300円(絵本塾出版)

『なみだでくずれた万里の長城』

子どものいない夫婦にツバメが授けた女の子は、美しい娘になり、夫を迎えました。やがて、労役に連れていかれた夫に会うため、北の果て〈万里の長城〉へ千里の旅に出ます。そして、そこで見たものは……。中国で長く語り継がれてきた民話です。

文／唐 亜明
絵／蔡 皋
1,800円(岩波書店)

『からだのなかにはなにがある？』

冷蔵庫に食べ物、貯金箱にお金が入っているように、体の中には何が入っているのでしょう。食べ物いっぱい、飲み物いっぱい、それから空気。うんちやおしっこもあるんじゃないかな？　気になって、体を触ったり、のぞいたりしてみました。

文／キム ヨンミョン
絵／キム ユデ
訳／かみや にじ
1,500円(岩波書店)

今号の注目

『いっしょだよ』

写真・文／小寺 卓矢
1,400円(アリス館)

ピンと張りつめたすがすがしい空気と、あらゆる生き物を包容し、育む森の息づかいが聞こえてきそうな、美しい北の森の写真絵本です。みんな一緒に生きている。人間もその仲間なのだと感じます。

作家さんに聞きました

本作は『森のいのち』（06年）、『だって春だもん』（09年）に続く3冊目の絵本になります。今回もまた北海道や東北で撮影した森の動植物の写真にことばを添えた「森の写真絵本」です。

森で写真を撮ることを通じ、僕は森からたくさんのことを教わってきました。自然がもつ美しさやたくましさ、その裏腹の脆さと儚さ。そして、自然を形づくっているひとつひとつのいのちの貴さ。森がレンズの向こうに見せてくれる風景は、すなわちたくさんの生き物たちが織り成す「いのちの風景」なのだということ。

前作、前々作では、そうした森のいのちそのものがもつ不思議さや美しさを表現しようと考えました。そして今回は、いのちをもつものとして「どう生きるのか」を考えたいと思い、「いっしょ」をテーマにしました。森の生き物たちのさまざまな「いっしょ」の様子を通し、他者と共に生きることの意味に思いを馳せました。

森には、何かといっしょでないいのちなど、ただのひとつもありません。みんな他の存在と関わりながら今を生きています。ときにワイワイ賑やかに、ときにじっと互いに支え合いながら。

でも一方で、似たもの同士だろうと違うもの同士だろうと、何かと何かが「いっしょに生きる」ということは、案外しんどいことなのかもしれません。いっしょであるということは、すごく豊かなことでもある反面、じつは窮屈なことであったり、ときには結構残酷なことでもあるのかな……と森の営みを見ていると思います。「いっしょ」って、明るいことばの響きとは裏腹に、じつは複雑な意味をもっているのかもしれません。（特に昨年の3・11以降、僕は別の観点でそれをことさらに強く感じています。）

それでも森の生き物たちは、他者と共に生きることをやめようとしません。そのことに僕は惹かれます。きっと「共に在る」ということの中には、いのちそのものにとっての大事な「秘訣」が隠されているのではないかと感じるのです。……と、作者である僕はそんなややこしいことを考えていたりもしますが、この本自体はちっともややこしくありません。

読んでくださる皆さんには、森の生き物たちがいっしょに生きている様子の美しさや楽しさを写真を通じて味わっていただければ、それだけでとても嬉しいです（表紙から裏表紙までお楽しみあれ）。

どうぞ、大事な人と「いっしょ」に絵本の中の森散歩をお楽しみください！

小寺 卓矢　こでら・たくや

1971年神奈川県生まれ。写真家。大学卒業後にカナダ、アメリカに渡る。帰国後、北海道に移住し、「森に息づくいのちの繋がり」をテーマに本州や北海道の森林風景を撮影。読みきかせやスライド上映講演会、写真絵本づくりのワークショップなどで全国を訪問している。主な作品に『森のいのち』『だって春だもん』（ともにアリス館）。
http://www.ne.jp/asahi/photo/kodera/